広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	Ｃ・Ａ・ベイリ著、平田雅博・吉田正広・細川道久訳　『近代世界の誕生　グローバルな連関と比較　一七八〇 － 一九一四年』
Author(s)	東田, 雅博
Citation	史学研究 , 304 : 91 - 95
Issue Date	2019-10-21
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00055665
Right	
Relation	

＝書評＝

C・A・ベイリ著、平田雅博・吉田正広・細川道久訳『近代世界の誕生　グローバルな連関と比較　一七八〇－一九一四年』

東田雅博

まずは、目次を紹介しておこう。上下巻七〇〇頁を越える大著である。

序章
Ⅰ　旧体制の終焉
第一章　旧体制と「初期グローバリゼーション」
第二章　旧体制から近代性への道
第三章　収斂する諸革命　一七八〇－一八二〇年
Ⅱ　生成する近代世界
第四章　世界革命のはざま　一八二五－六五年頃
第五章　工業化と新都市
第六章　国民、帝国、エスニシティ　一八六〇－一九〇〇年頃
（以上　上巻）
Ⅲ　帝国主義時代の国家と社会
第七章　近代国家の神話とテクノロジー
第八章　自由主義、合理主義、社会主義、科学の理論と実践
第九章　宗教の帝国
第一〇章　芸術と想像力の世界
Ⅳ　変化、衰退、危機
第一一章　社会的ヒエラルキーの再編
第一二章　先住民の絶滅と生態系の破壊
終章　大加速　一八九〇－一九一四年頃
（以上　下巻）

評者がC・A・ベイリの著作に初めて出会ったのは *Indian Society and the Making of the British Empire* (1988) であった。そのつぎが *The Raj: India and the British, 1600-1947*

(1990) である。したがって、評者の頭の中ではベイリはインド史、あるいは英印史の専門家であった。そう思っておられた方も多いのではなかろうか。だから、その後インド史から遠ざかると共に、ベイリとも遠ざかった評者が『近代世界の誕生』を手に取った時には正直驚いた。しかも、そのペーパーバック版（二〇〇四年）の表紙にはニーアル・ファーガソンの「傑作」という評言が踊っていたのである。たしかに傑作であると思われたし、今ではグローバル・ヒストリーの傑作であるとの評価が定着している。ファーガソンは日本では『文明　西洋が覇権をとれた六つの真因』（仙名紀訳、勁草書房二〇一二年）で知られている。このファーガソンが「傑作」と認めているのである。この意味は大きいだろう。というのは、評者の私見によればファーガソンはヨーロッパ中心主義史観を色濃く留めた歴史家であるが、ベイリはもちろんヨーロッパ中心主義史観に囚われた歴史家などではないからである。つまり、本書はヨーロッパ中心主義史観に染まった歴史家をも「傑作」と認めさせるほどの「真の傑作」（サンデー・タイムズ）なのである。[1]

では、『近代世界の誕生』はどういう意味で傑作であると言えるのか。評者がこの著書をはじめて眼にした時、『帝国の時代』（野口 建彦、長尾 史郎、野口 照子訳、みすず書房、一九九三年）などで知られる二〇世紀最高の歴史家と評しても過言ではない、エリック・ホブズボームの著書が頭に浮かんだ。スケールが桁違いに大きく、かつ通常の歴史書では排除されてしまう芸術などの分野までも視野に収めているところが両者に共通するからである。しかし、ベイリの著書を読み進めれば両者の違いは明らかになる。ベイリは、一八世紀の末から二〇世紀の初頭までの時代の「グローバルな連関と比較」を描くと謳うのだが、これを文字通りにやってのけるのである。ヨーロッパ、南北アメリカ、アジア、イスラム世界、そしてアフリカを、つまりまさにグローバルな世界全体を視野に収め、しかも人間の営みのあらゆる領域、政治、経済、社会、思想、科学、宗教、芸術を対象としてである。世界の衣服や人名の統一化まで論じている。まさに圧巻のグローバル・ヒストリーである。このベイリの傑作を前にすればホブズボームの傑作もいささか霞んでしまうのはやむを得まい。

具体的に本書の内容を手短に紹介しよう。とはいえ、目次をご覧になれば分かるように、それはとても困難である。かなり乱暴にならざるを得ないことをお断りしておく。本書はグローバル・ヒストリーの傑作であると述べたが、やはりまずはベイリのいうグローバル・ヒストリーとは何かを紹介しなければならない。ベイリは地方史や国民史を否定するわけではないが、すべての歴史はその広がりと複雑さにおいて結局のところグローバル・ヒストリーにならざるをえないという。近代世界はそもそもグローバルな性質を帯びているのである。一八世紀においてさえ政治や社会の変化は相互に連関しており、フランス革命やアメリカ独立戦争は世界中に影響

を与えていた。このことは非西欧世界がただ西欧世界の影響下にあったことを意味するわけではない。もちろん、非西欧世界からの反作用もあった。世界は統一化へ向かうが、内的には複雑化し、政治、経済、文化、あらゆる領域での相互依存関係を強めていく。

ベイリはかれが扱う時代をつぎのように概括する。

「本書が扱う期間の始まりには、世界はいまだ多中心的であった。東アジア、南アジア、アフリカは、たとえヨーロッパ人とその海外植民地がすでに優位な立場で競争していたにしても、さまざまな社会・経済的生活の場面でいまだ活力と主導権を保持していた。本書が扱う期間の終わり、すなわち日本の興隆やヨーロッパ外のナショナリズムが始まる直後には、ヨーロッパの「優位」は深刻な挑戦にさらされるようになる」（三一四頁）。

ベイリは、この間、西洋が支配的地位に就いたことを認めている。だが、ベイリは決して西洋中心主義史観の持ち主ではない。ベイリはこの一節の後をつぎのように続ける。「西洋の支配という確固たる事実を考慮に入れながら、世界的な事件の相互依存関係を示す必要がある。同時に、このヨーロッパの支配が世界の大半においていかに部分的で一時的なものにすぎなかったかも示さなければならないのである」、と。非西洋世界の人々はたしかに西洋の影響を受けるが、それを彼らに役立つものに発展させ、ついには西洋に挑戦しうるものを生みだす力を持っていたのである。日本の幕末・明治以降の近代化の歴史はこうした事例の典型的な一例といえよう。ベイリは西洋中心主義史観の持ち主ではないと述べた。それはその通りなのだが、どうもベイリは西洋中心主義史観の力を侮っているのではないかと思われる節もある。ベイリは終章で「われわれが必要とするのは、世界史を方向づけ直すこと（リオリエント）というより、それを脱中心化することである」（六三四頁）、という。だが、西洋中心主義史観の強靱さを考えれば、まずはそれを徹底的に揺さぶる「リオリエント」が必要だろう。そうして初めて「脱中心化」も可能になるはずである。

ベイリの著書では芸術の領域をも視野に収めていると指摘した。この点は大いに注目したいが、もうひとつとくに注目すべき点がある。九章の「宗教の帝国」である。この章は本書のなかで最も野心的な部分かもしれない。芸術と違い宗教は重要な分野としてこれまでも十分に論じられてきたはずである。だが、「宗教の帝国」はこれまでの通史的理解を否定してしまう。評者は「宗教の帝国」とのタイトルを初めて眼にした時、正直いささか戸惑いを感じた。一九世紀の世界は世俗化の時代、宗教的勢力が後退した時代として知られている。そこに「宗教の帝国」である。ベイリは一九世紀を「現在のわれわれが使う意味での「宗教」が意気揚々と再登場し、拡大した時代」（四三八頁）として捉えるのである。ベイリの描く近代世界は決して世俗的な世界ではないのである。世界に混乱と不安定さをもたらしているとしか思えないトラン

プ大統領がアメリカの多数のキリスト教福音派によって支持され、かつ彼らの支持がこのトランプ政権を強固に支えているという今日の驚くべき状況に当惑する人々は、これまでの通史的理解に囚われすぎているのかもしれない。この「宗教の帝国」を読むことである程度今日の何とも異様な状況を少しは理解できるかもしれない。

ベイリは世界のあらゆる地域を、そしてあらゆる領域を視野に収め世界の各地域の相互連関と相互依存を描くのだが、それだけに相当な無理もしている。この点について、さきに大いに注目すべきだと述べた芸術の分野に関連させながら述べてみたい。

ベイリは芸術を論じた章（一〇章「芸術と想像力の世界」）で一九世紀を「今までよりももっと根本的な変化が諸芸術と文学の両方で起きていた」時代と捉える。そこでは「グローバリゼーション、のちには「国際化」、そして統一性をめぐって競い合う傾向」が見られたという。この時代には西洋の芸術と文化が非西洋世界に流れ込み、非西洋世界の伝統的芸術に打撃を与えた。この影響を壊滅的と捉える論者もいるが、実際には非西洋世界は西洋の芸術や文化を「借用し、流用」する力を持っていた。逆に、「一八八〇年以後、アフリカ、アジア、ポリネシアのモチーフや様式がヨーロッパの絵画、彫刻、装飾芸術に侵入」（四九六頁）する現象が見られた。

ベイリは芸術の領域まで扱う理由を注でつぎのように説明している。

「私は芸術史の専門家とはとうてい言えない。だが、芸術は貴重な歴史資料を提供する。にもかかわらず、社会史家、政治史家はほとんど無視しており、とりわけ一九世紀についてはそうである」（一〇章注一）。

評者はこの一文に心から同意するし、専門家ではないが重要であるが故に挑戦するというベイリの姿勢に心から共感する。だが、こうした点に危うさを感じることも確かである。一例を挙げよう。

ベイリは、原著の方だが、この章で japanoiserie という単語を用いている（五一五頁）。ジャポニスムに関連する問題を論じたところである。評者は近年はジャポニスム研究に専念しており、ジャポニスムについての知識はそれなりに持っているつもりだが、これまでこの単語を眼にしたことはない。通常ジャポニスムを論じる際に使用されるのは、フランス語系の japonisme,japonaiserie 英語系の japonism,japanism などである。japanoiserie はおそらくジャポニスムに先行する一七世紀から一九世紀初頭の中国ブームを指す単語、シノワズリ chinoiserie を参考に作られたものであろう。こうした単語を使用してしまうところに危うさを感じるのである。（翻訳では「日本趣味」と訳されており違和感なく読めるだろう）。ジェームズ・マクニール・ホイッスラーは『青と金のノクターン　オールド・バターシー・ブリッジ』など日本の影響を強く受けた画家としてよく知られているが、ここでは「康熙帝期の青花様式を模範としたいわゆるホーソーン壺の流行を広

めた」（四九六頁）との言及しかない。このあたりも違和感を感じるところである。また、専門家ではないことを断っているのだからやむを得ないとはいえ、参考文献にはジャポニスムの専門書は一冊も挙げられていない。さらに言えば、文学を扱ったところでは「西ヨーロッパでは、新しい文学がチャールズ・ディケンズ、トマス・ハーディ、シャルル・ボードレールの小説によって告知された」（五二三頁）といった文章に出会う。ボードレールは誰にとっても『悪の華』の詩人であろう。なにしろあらゆる領域を扱うのであるから、これはケアレスミスとして黙過すべきであろうが、やはり少々気にはなる。しかし、ベイリの大業を前にすればこれらはまさしく微瑕であろう。

とはいえ、訳者にとっては本書の翻訳はまさに難行であったはずである。ごく一部を紹介できただけだが、これだけ多岐にわたるテーマを展開し、かつ実に細やかな点にまで眼が行き届いた大著を翻訳する苦労は想像にあまりある。したがって、訳文に全く問題なしとは言えまいが、これはやむを得まい。これまでにもジョー・グルディとデイヴィッド・アーミテイジの『これが歴史だ！』（刀水書房、二〇一七年）など真に翻訳に価する書物を翻訳してきた訳者たちならではの訳業である。

ベイリは、アナール学派を率いたフェルナン・ブローデルがグローバル・ヒストリーの先駆者だというが、本書はこのグローバル・ヒストリーのひとつの到達点を示すものと言えよう。グローバル・ヒストリーにかんする著書はいまや文字通り山ほどあるが、本書はグローバル・ヒストリーとは何かを説得的に読者に提示する必読の一冊である。まさに博覧強記の人、ベイリが描く近代世界の描写は読者を虜にするだろう。

（名古屋大学出版会、二〇一八年）

注（1）　ニーアル・ファーガソン、そしてヨーロッパ中心主義史観については、つぎを参照。東田雅博『シノワズリーか、ジャポニスムか　西洋世界に与えた衝撃』中央公論新社、二〇一五年。

（金沢大学　名誉教授）